

論文番号 43

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名(原題/訳)

Reevaluation of the confounding effect of cigarette smoking on the relationship alcohol use and lung cancer risk, with larynx cancer used as a positive control

喉頭がんを対照として飲酒と肺がんリスクの関係に対する喫煙の交絡因子としての効果の再検討
執筆者

Edith A Zang, Ernst L Wynder

掲載誌(番号又は発行年月日)

Prev Med 2001; 32: 359-370

キーワード

alcohol, confounding, larynx cancer, lung cancer, smoking

要旨

(背景) 喫煙が肺がんの危険因子であることは明らかであるが、アルコールの影響については議論がある。著者らは、単相関分析で明白に認められる飲酒と肺がんの正の関連が、喫煙という交絡要因の影響であるという仮説をたててその検証を行った。

(対象と方法) 分析方法は症例対象研究であり、全米各地の26病院に入院中の男性2,953人、女性1,622人の肺がん患者、男性521人、女性159人の喉頭がん患者を症例とし、男性8,169人、女性4,154人の対照群を設定した。これらは1981~1994年の入院患者で、対照群はがん以外の疾患、喫煙と関連しないがん(前立腺、白血病、リンパ腫等)で入院した患者から、性、年齢、人種、病院、入院時期をマッチして抽出された。喉頭がんは肺がんに対する positive control

(訳注;一般的に症例・対照研究の対照者は正常者であるが、ここでは正常ではない対照者というニュアンスと思われる)として用いられた。相対危険度は交絡要因を調整して多重ロジスティック回帰でオッズ比として推定された。

(結果) 飲酒量はウィスキー1オンス(訳注;おそらく1ポイント;0.47Lの16分の1で30ml程度。ほぼ日本酒0.5合に相当)に換算して要約された。飲酒量1日1オンス以下を1.0とすると、5オンス以上の肺がんのオッズ比は2.4(2.0-2.8)で有意であった。しかし喫煙を調整するとオッズ比は1.2(1.0-1.4)となりその影響は消失した。これはすべてのタイプ(扁平上皮、腺がん、小細胞がん、大細胞がん)の肺がんで同様であった。対照的に飲酒の喉頭がんに対するオッズ比は喫煙を調整する前は10.6(7.0-16.0)、飲酒を調整しても5.6(3.7-8.6)と有意に高かった。

(結論) しばしば報告される飲酒と肺がんの関連は、交絡要因としての喫煙でほぼ説明可能と考えられた。飲酒は肺がんの危険因子ではないが、喉頭がんの危険因子である可能性はある。